令和７年度壮行式校長激励のことば

陸上競技のハンマー投げ。高校男子は 6.00kg、女子は 4.00kg の重い鉄球にワイヤーがついていて、それを直径 2.135mの小さなサークル内で回転運動をもって放り投げ、距離を競う競技。

選手は、投げる前に「行きます」と大きな声を出す。これからハンマーを飛ばします、ということを周囲に伝える、安全のためのかけ声です。併せて「心の準備が整った。私はこれから投げるぞ」という宣言でもあるように思われます。

陸上競技の大会では、この「行きます」に対して「はいっ」と複数人から声がかかる。「はいっ」と答えているのは、同じチームの仲間です。この場合の「はいっ」には、「よし、思い切っていけ！」とか「見守っているよ！」という気持ちがこもっていることを感じます。選手にその思い伝えるための声がけなんだろうな、そう思っています。

陸上競技の大会では当たり前の風景ですが、必ずしも当たり前ではないのだなと感じた瞬間がかつてありました。全国大会に出場したハンマー投げの選手が「行きます」と声がけしたとき、何も返事が無かったのを目にしたときです。

単独出場した選手でしたから、会場に応援のチームメイトはいない。だから「はいっ」というかけ声はない。

「なるほど、そうだよな。「はいっ」のかけ声はかからないよな」、そう納得したものの、「寂しいな」という感じがしました。その選手がひどく孤独であるように感じてしまったのです。

同時に、あの春季大会や総体や秋季大会の「行きます」に対する「はいっ」の声の温かさに気付きました。あの「はいっ」という仲間の声は、これから投げる選手に力を与えていたことを痛感しました。

走り幅跳びの選手が、両腕を上げて拍手し、会場に拍手を求める光景もよく目にします。観客の拍手が力を与える、だからこそ、選手はそれを求めるわけです。「はいっ」という声、拍手。応援としてはささやかに思えるかもしれませんが、確実に選手に力を与えます。

ですから皆さん、今日は選手たち、心からの声がけ、エール、拍手を送ってください。私たちの仲間を、心をこめて送り出しましょう。

大湊高校の選手諸君、健闘を祈ります。

令和７年５月２１日

校長　伊藤文一